

ラオス中部農村におけるバンコク出稼ぎ

Transnational labor migration to Bangkok from a rural village in Central Laos

丹羽孝仁^{*} (帝京大学)・中川聡史 (埼玉大学)

NIWA Takahito (Teikyo University)
and NAKAGAWA Satoshi (Saitama University)

^{*}niwa@ucre.teikyo-u.ac.jp

1. 研究の目的

これまでの国際人口移動の研究においては、それをタイ-ラオス間に限定しても、ラオス国内の就労機会の欠如やタイ国内で 3K に従事する労働者の不足といったプッシュ・プル要因を指摘したものだけでなく (Chanthavysouk, 2006; Chalamwong and Prugsamatz, 2009)、タイ-ラオス間の政策による不法滞在者の合法化を巡る議論が現れてきた (Holomyong and Punpuing, 2014)。しかし、既存研究では送出地もしくは受入地のどちらかの情報を元にしており、国際人口移動が出身村に与える影響を明らかにしているとは言いがたい。そこで本報告は、ラオス中部サワンナケート県の水田農村 K 村を事例として、バンコクへの出稼ぎの特徴を明らかにする。

人口 742 人の K 村からバンコクへの出稼ぎは、243 名 (2014 年末) に上る。2013~2016 年のバンコクでのフィールド調査によって、このうち 135 名とコンタクトを取り、出稼ぎに関する情報を聞き取った。その結果、以下の 3 点が明らかとなった。なお、本報告は丹羽・中川 (2015) で報告した内容を補強し、また別視点から分析を加えたものである。

2. K 村からの出稼ぎの全体像

K 村からバンコクへの出稼ぎは、1980 年代後半から増加し始める。図 1 に示される出稼ぎ者の年齢を確認すると、1985 年時点、K 村からの出稼ぎ者は 6 名で、その平均年齢は 19 歳、最低年齢 13 歳であった。これが 2014 年には、243 名の出稼ぎとなり、その平均年齢は 27.6 歳となった。一方で、出稼ぎ者の最年少者は 12 歳である。平均年齢はこの 30 年の間に徐々に上昇してきたが、最低年齢はほぼ一貫して変わっていない。ここから 2 つの点が明らかになる。1 つ目に K 村において教育に対する関心はあまり改善しておらず、教育機会よりも就労機会、それも海外での就労機会を優先していることである。2 つ目に平均年齢の上昇は、出稼ぎ期間の長期化によってもたらされていることである。2014 年には 50 歳を超えての出稼ぎ者がいることから裏付けられる。

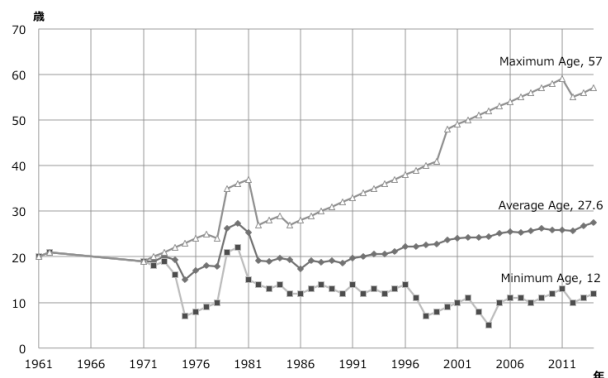


図 1 K 村からの出稼ぎ者の年齢の変化
インタビュー調査結果から作成

3. 出稼ぎの情報ネットワーク

出稼ぎの多くは、チェーン・マイグレーションで説明することができる。出稼ぎ者は、親族や友人の口伝によるバンコクの情報を頼りに移動しているためである。例えば、24 時間営業をする飲食店には 2016 年 11 月現在で 25 名の若者が出稼ぎに来ている。彼らの平均年齢は 21.6 歳と、村全体での出稼ぎ者の平均年齢 27.6 歳と比較して若い。

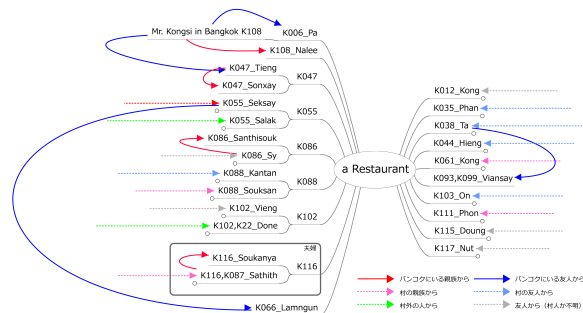


図2 飲食店における
K 村出稼ぎ者の情報ネットワーク
インタビュー調査結果から作成

彼らが誰から情報を得たのか、その模式図を示すと図 2 のようになる。村内の友人か村外の友人か情報源が定かで無い 5 名を除く 20 名の内、バンコクにいる親族からが 5 名、村の友人から 5 名、村の親族からが 4 名、バンコクにいる友人からが 4 名、村外の人からが 2 名という内訳であった。親族や友人から知り得た情報をキョウダイに広めたり、別の友人へ広めたりと、その情報ネットワークは複雑化している。

なお、この飲食店では店舗の上層階に雇用主から提供された宿舎があり、月 500 バーツと格安で利用できる。同世代の村の若者が同じ店で働いていること自体が、出稼ぎ移動を心理的に容易としていることが考えられる。他方で、自らが滞在先を見つけている事例は限られていることから、バンコクで獲得できる期待賃金だけでなく、その就労可能性（人員募集の情報）や生活費（家賃の情報）についても考慮していると捉えられる。

4. 出稼ぎと育児の関連性

バンコクでのインフォーマントのおよそ半数にあたる 73 名（58 組）が結婚をしている（再婚者を含み、離婚者を除く）。子供を持つ夫婦は 37 組で、計 61 名の子供が確認できた。バンコクで両親と同居する子供が 25 名、タイで両親と別居する子供が 5 名、K 村に暮らす子供が 21 名、他村に暮らす子供が 10 名という内訳であった。配偶者の出身地によって子供の養育の場所は異なるが、それでも過半数の夫婦において子供を祖父母の元に置き、夫婦がバンコクで出稼ぎをする形態が一般的といえよう。

なお、子供全員がバンコクで両親と同居するのは 11 世帯であるが、将来的に世帯がバンコクに定着し K 村への帰属意識を失うかは未知である。この点は K 村内での親族関係や生業との観点に着目して検討をする必要がある。

本研究は JSPS 科研費（課題番号 25257004：研究代表者・横山智）の助成を得て実施した。

文献

- 丹羽孝仁・中川聡史（2015）ラオス南部水田農村の若者出稼ぎと村との関係．日本人口学会第 67 回大会発表要旨集，117.
- Chalamwong, Y. and Prugsamat, R. (2012). Labor Migration in Thailand: Recent Trends and Implications for Development. *TDRI Quarterly Review*, 24(3), 3-9.
- Chanthavysouk, K. (2006). Labour Export: A contribution to Lao Development. *Technical Background Paper for the third National Human Development Report Lao PDR 2006*.
- Holumyong, C. and Punpuing, S. (2014). A Cost-Benefit Analysis of the Legal Status of Migrant Workers in Thailand. In Adams, R. H. Jr. and Ahsan, A. (Ed.). *Managing International Migration for Development in East Asia* (pp. 263-282). Washington DC: The World Bank.